

看護学生のコミュニケーション・スキルと課題

徳珍 温子*・津田 右子・足高 孝夫・山東 純子

大阪信愛学院短期大学

Human and Environment Vol. 12 (2019)

Problems Faced by Student Nurses in the Integrated Practicum

Atsuko Tokuchin, Yuko Tsuda, Atsuo Ashitaka and Jyunko Santo

Osaka Shin-Ai College, Japan

看護学生の日常生活におけるコミュニケーション・スキルの傾向と課題を明らかにし、看護基礎教育の中で必要とされているコミュニケーション教育をより適切なものとすることを検討する資料として本調査を行った。看護学生の日常生活におけるコミュニケーション・スキルの傾向は、1年次に高く、2年次に低下し、3年次に緩やかに上昇するものであった。他者受容が高く自己主張が低い結果については、今後継続して調査する必要がある。

キーワード：コミュニケーション・スキル、看護学生

1. はじめに

看護の対象者とコミュニケーションを行いアセスメント力を高めることは重要な技術であると同時に看護基礎教育の中で学生に身につけさせたい技術であるが[1]、情報通信技術（ICT：Information and Communication Technology）の発達に伴い、社会の中で人に向き合う直接的なコミュニケーションの機会が減少し[2]、看護学生においても臨地実習でコミュニケーションに困る場面、例えば、血縁者や学校教員以外の異なる世代とのコミュニケーションが実習の場で初めての体験となることやカンファレンスにおいて緊張し発言ができないなどを目にする機会が増加してい

るのではないかと感じることもある。

そこで、看護学生の日常生活におけるコミュニケーション・スキルの傾向と課題を明らかにし、看護基礎教育の中で必要とされているコミュニケーション教育をより適切なものとするために、学年別の傾向を明らかにしたうえでどのような介入が必要であるのかを検討する資料として本調査を行った。

2. 方法

2.1. 調査期間及び方法

調査期間：平成30年5月

調査方法：授業終了時に調査目的等を説明のうえ、配布し、事務室カウンターに回収箱を2週間設置。

2.2 調査対象

A看護女子短期大学（3年課程）の全学生を対象に、同意を得られた286名（1年生90名・2年生103名・3年生93名）に質問票を配布。有効回収165票（1年58票・2年46票・3年61票）、有効回収率57.7%。

*大阪信愛学院短期大学看護学科
〒538-0053 大阪市鶴見区鶴見6-2-28
E-mail: atokuchin@osaka-shinai.ac.jp

受付：2019年9月30日 受理：2019年10月5日

©2019 大阪信愛学院短期大学

有効回答者は、全員女性で、年齢層は18～21歳が約90%で、約10%程度がいわゆる社会人学生で22～40歳代である(158名回答、無回答7名)。これは入試合格者の分布とほぼ同じである。

2.3. 調査内容

藤本らが開発したコミュニケーション・スキル尺度 ENDCOREs を用いて無記名自記式質問紙調査を行った。コミュニケーション・スキル尺度 ENDCOREs は、自己統制・表現力・読解力・自己主張・他者受容・関係調整の6つの下位尺度(6スキル)からなる24項目で、信頼性、妥当性は検討されている[3-5](表1)。

7件法で回答してもらい、「かなり得意」を7点、「得意」を6点、「やや得意」を5点、「ふつう」を4点、「やや苦手」を3点、「苦手」を2点、「かなり苦手」を1点として、6スキルごとの平均値をそれぞれのスキルの得点として分析をおこなった。

尺度の信頼性係数は、「自己統制」は $\alpha=.72$ 、「表現力」は $\alpha=.85$ 、「読解力」は $\alpha=.90$ 、「自己主張」は $\alpha=.85$ 、「他者受容」は $\alpha=.92$ 、「関係調整」は $\alpha=.87$ であった。

表1 コミュニケーション・スキル尺度 ENDCOREs

自己統制	自分の衝動や欲求を抑える。
	自分の感情をうまくコントロールする。
	善悪の判断に基づいて正しい行動を選択する。
	周りの期待に応じた振る舞いをする。
表現力	自分の考えを言葉でうまく表現する。
	自分の気持ちをしぐさでうまく表現する。
	自分の気持ちを表情でうまく表現する。
	自分の感情や心理状態を正しく察してもらう。
読解力	相手の考えを発言から正しく読み取る。
	相手の気持ちをしぐさから正しく読み取る。
	相手の気持ちを表情から正しく読み取る。
	相手の感情や心理状態を敏感に感じ取る。
自己主張	会話の主導権を握って話を進める。
	周りとは関係なく自分の意見や立場を明らかにする。
	納得させるために相手に柔軟に対応して話を進める。
	自分の主張に論理的に筋道を立てて説明する。
他者受容	相手の意見や立場に共感する。
	友好的な態度で相手に接する。
	相手の意見をできる限り受け入れる。
	相手の意見や立場を尊重する。
関係調整	人間関係を第一に考えて行動する。
	人間関係を良好な状態に維持するように心がける。
	意見の対立による不和に適切に対処する。
	感情的な対立による不和に適切に対処する。

2.4. 分析方法

SPSS Ver.16 を用い ENDCOREs 尺度の各下位尺度について学年別にF検定で比較した。

2.5. 倫理的配慮

学生の参加の自由、途中辞退の自由と不利益がない、個人データ数値化、守秘義務厳守を文書と口頭で説明し、任意に質問票の回答をもって調査協力への同意を得たと判断した。本研究は大阪信愛学院短期大学倫理審査委員会より承認を得た。

企業等利益相反はない。

3. 結果

3.1. 6スキル(各下位尺度)別平均

6スキルの各学年の平均値は、表2のとおりである。それをグラフにしたのが図1である。

3.2. 学年による下位尺度の比較

それぞれの下位尺度ごとに学年比較した。自己統制 ($F=2.5, df=2, n.s.$) 読解力 ($F=2.05, df=2, n.s.$) 自己主張 ($F=0.13, df=2, n.s.$) で有意差は見られなかったが、表現力 ($F=4.66, df=2, p<0.05$) 他者受容 ($F=6.57, df=2, p<0.01$) 関係調整 ($F=4.55, df=2, p<0.05$) において有意差が確認された(図1)。

表2 学年別スキルの平均値

スキル	1回 生	2回 生	3回 生	合計	藤本 大坊 (2007)
自己統制 (管理系基本)	4.71	4.44	4.40	4.52	4.84
標準偏差	0.89	0.71	0.96	0.88	
関係調整 (管理系対人)	5.00	4.47	4.77	4.77	4.95
標準偏差	0.87	1.03	0.78	0.90	
表現力 (表出系基本)	4.42	3.98	3.82	4.07	4.21
標準偏差	1.09	0.91	1.19	1.11	
自己主張 (表出系対人)	3.84	3.79	3.74	3.79	4.17
標準偏差	1.18	0.73	0.97	0.99	
読解力 (反応系基本)	4.95	4.61	4.68	4.75	4.97
標準偏差	0.94	0.83	0.98	0.93	
他者受容 (反応系対人)	5.51	4.87	5.23	5.23	5.37
標準偏差	0.86	0.87	0.91	0.91	

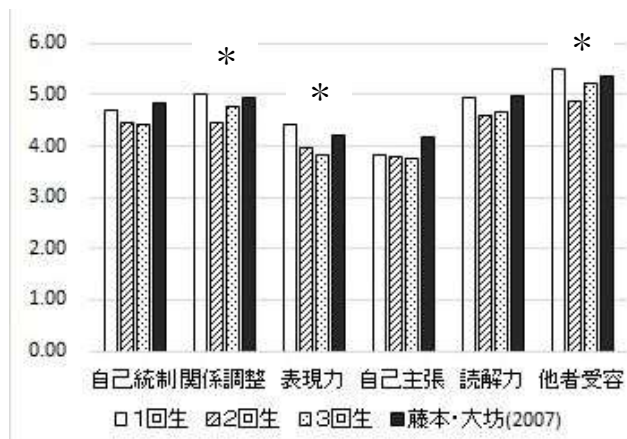


図1 学年別スキルの平均値 * : p<0.05

3.2. 学年による下位尺度の比較

それぞれの下位尺度ごとに学年比較した。自己統制 ($F=2.5$, $df=2$, n.s.)、読解力 ($F=2.05$, $df=2$, n.s.)、自己主張 ($F=0.13$, $df=2$, n.s.)で有意差は見られなかったが、表現力 ($F=4.66$, $df=2$, $p<0.05$)、他者受容 ($F=6.57$, $df=2$, $p<0.01$)、関係調整 ($F=4.55$, $df=2$, $p<0.05$)において有意差が確認された(図1)。

4. 考察

4.1. 看護学生のコミュニケーション・スキルの傾向

全体では他者受容が高く、全学年で自己主張が低い値であった。対人援助を目指す学生として、他者受容や関係調整が高い傾向にあることについては望ましい結果である。なぜこれらが他の項目に比較し、有意に高い傾向が示されたのかについては、対人援助職を目指す学生の傾向と関連があるのではないかと考えることができる。

しかし、藤本・大坊(2007)の大学生データでは、高いスキルは他者受容で低いスキルは自己主張で同傾向にあったことから[1]、日本の学生において同様の傾向が示されるのであれば、看護学生と別のキャリアを志望する学生との比較を確認することが、看護学生のコミュニケーション・スキルを確認するうえで必要ではないかと考える。また、看護においてコミュニケーションは正課教育科目であり、2年次に低下したことについては、理解したからこそその戸惑いであるのであれば、コミュニケーション・スキル向上への必要なプロセスであると考えられる。

1年次より ENDOCOREs 尺度の項目において自己主張が低い結果は、看護学生が対人関係やグループカンファレンスでの発言能力低下が危惧される。これはつまり社会人基礎力として、経済産業省が2006年に提唱した「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで

働く力」の3つの能力(12の能力要素)から構成されている、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」[6]に対する教育上の課題ではないかと考える。

4.2. 学年による下位尺度の比較

表現力では学年が上がるに従って得点が低下するという傾向がみられた。藤本・大坊(2007)の大学生データでは、高いスキルは他者受容で低いスキルは自己主張で同傾向にあったが[3]、1年生の表現力は他の2学年と大学生データより高かった。

1年生に表現力が高かったのは、入学直後の5月の調査であり高校時代の自由な生活が影響している可能性があり今後縦断的研究の必要がある。多様な人々と接することが、対象者に対して肯定的な感情をもたらすことがあるため[7]、看護系の学校に進学した後も、様々な生活背景や信条を持つ人々と積極的にかかわる体験を、組織的に取り組むことも方策の一つであると考える。挨拶を積極的に行うことが健康生活習慣の改善につながるという調査結果から、継続的に行うことでセルフ・エスティームの向上への可能性が示唆される中で[8][9]、日々の学生への関わりから、即ち正課教育以外の実施内容として、メンタリングの活用等の実践を検討する必要があるのではないかと考える[10]。

また、コミュニケーション・スキルの自己主張が低い傾向が学年毎で変化がないことは入学時から日常生活の中で多様な人々とコミュニケーションを持つことが、今後の課題である。厚生労働省の平成29年版厚生労働白書によると、なにかにつけ相談をしたり、たすけ合えるようなつきあいは、1973年には34.5%であったものが2013年には18.1%に減少し、一方、会ったときに、あいさつをする程度のつきあいは1973年では15.1%であったが2013年には27.6%に上昇していることから[11]、対人援助職育成である看護職養成校は、多様な人々とコミュニケーションを持つ仕組みを計画する必要があると考える。

5. おわりに

看護学生の日常生活におけるコミュニケーション・スキルの傾向は、1年次に高く、2年次に低下し、3年次に緩やかに上昇するものであった。他者受容が高く自己主張が低い結果については、看護を目指す学生にみられる傾向であるのか、また、調査対象校の学生の特徴であるのかなど、今後継続して調査する必要がある、これがコミュニケーション・スキルの傾向を知る上で本研究の限界である。

看護基礎教育の中で必要とされているコミュニケーション教育として、正課教育と並行して正課教育以外の実施内容を今後検討したい。

文 献

- [1] <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf> (Access2019.9.5)
- [2] 徳珍温子：地域で支え合う「安心」を考える，学校危機メンタルサポートセンターフォーラム報告書 学校危機の諸相とその予防戦略を考える～大阪教育大学における学校安全の取り組み～，3，90-93 (2006)
- [3] 藤本学・大坊郁夫：コミュニケーション・スキルに関する因子の階層構造への統合の試み，パーソナリティ研究 15, 347-361 (2007)
- [4] 藤本学：コミュニケーション・スキルの実践研究に向けた ENDOCORE モデルの実証的・概念的検討，パーソナリティ研究 22, 2, 156-167 (2013)
- [5] 大坊郁夫編：幸福を目指す対人社会心理学，193-210 ナカニシヤ出版 (2012)
- [6] <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> (Access2019.9.4)
- [7] 徳珍温子・藤田大輔：女子学生・生徒の「身体的」障害者イメージについての一考察，大阪信愛女学院短期大学紀要 39, 9-20 (2005)
- [8] 徳珍温子：女子学生の生活習慣自己点検の有用性について，第 37 回日本看護学会論文集 地域看護，228-230 (2007)
- [9] 徳珍温子：女子学生の生活習慣改善を目指したプログラム開発への試み，第 38 回日本看護学会論文集 地域看護，193-195 (2008)
- [10] 内田治子：大学生のキャリア支援を目的とする学校型メンタリング・プログラムの効果の検証—セルフ・エスティームおよびスキル・能力の向上—，日本教育心理学会第 61 回総会発表論文集，343 (2019)
- [11] <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/17/backdata/01-01-02-12.html> (Access2019.9.26)

論文集「人と環境」Vol. 12 (2019)
大阪信愛生命環境総合研究所編
